

まぼろし

牧師 山本 護

相変わらず寒いけれども、陽光の照度が増してきている二月。礼拝堂扉のガラス越しに、建築中の物置小屋に目をやると、ふいに郷愁めいた感情が湧きあがりました。しばし立ち尽くし、これまでの道のりをふり返ってみました。その理由はどうも見当たらない。もしかすると、過去ではなく未来から今に流れ込んでいるヴィジョンが、郷愁の香りを放っていたのかもしれませんが。「ああ、まぼろしとは、こういうことなのか」。

「その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る(ヨエル 3:1)」。この預言は、イエス亡き後の使徒ペトロが、その堂々とした説教の中で引用しています(使徒 2:17)。息子や娘の「預言」は言葉ですから一応は別物だとしても、老人の「夢」と若者の「幻」には何か違いがあるのでしょうか。

教会に幻滅しながらも、キリスト信仰に生きた哲学者キェルケゴール(1813~55)はこう記しています。「若者が自己自身について希望を抱いている時、彼は幻影の内にある。老人は老人でその青年時代を想起する仕方の中でしばしば幻影に捉えられている(『死に至る病』岩波文庫)。「若いキリスト／老いた教会」という哲学者の信仰ヴィジョン。このまぼろしをコペンハーゲンの市民と重ね見ていたのでしょうか。さらに解するなら、老人の夢をいわば歴史とし、若者の幻を来たるべき終末の隠喩として、過去と未来から「今」を規定しているのかもしれませんが。「死に至る病とは絶望である」という哲学者の警句、「幻がなければ民は墮落する(箴言 29:18)」という御言葉。こうした言葉が礼拝堂の扉越しに、物置小屋と共にゆらめいています。

八ヶ岳伝道所にはすでに 20 余年の出来事が刻まれています。しかし「歴史」を語るほどに形は整っておらず、未来から流れ込む「まぼろし」を受け取るばかりの段階でしょうか。とはいえ、そのまぼろしは、数多の人に注がれ、数多の人を介して現わされています。共に礼拝を献げる人々、折々に覚えて祈って下さる人々、伝道所というキリストの身体に接している人々。数えていくと相当な人数になりました。

まぼろしは幻影のままではありえず、礼拝堂の扉越しに見える物置小屋のごとくに形づくられる。増していく光の中、私たちの歩調で少しずつ現れていきます。そのうちに「青年時代を想起する老人の夢」、つまり自分たちの歴史によって「今」を規定する時も訪れるでしょう。でも、まだしばらくは、キリストのまぼろしに導かれるに任せて、心地よい起伏があり絶妙に蛇行する野道を進みます。Ω

